

「情況」7月号（一九七〇年）

地域闘争パルチザン 学園から地域・職域へ

淡路闘争委員会

「はじめに」

アメリカ帝国主義の反革命侵略に対するインドシナ人民の英雄的な革命闘争の展開、それに倅なう日帝の参戦体制への七二年をメルクマールとした準備は、来るべき階級決戦へ向けての我々の任務を、とりわけ決戦たるこの七〇年における「なにをなすべきか」を明確にさし示している。

日本帝国主義の後進国人民に対する反革命戦争への参戦構造のあらゆる局面をとらえての全面的政治暴露宣伝を、地域における住民のすべての諸階層にたいしての全人民的政治として展開し、『プチブル諸階層との統一戦線』の獲得、そのヘゲモニー獲得過程を通じての『革命的左翼の再編』、これがわれわれの「準備せよ」の出发点であり、全てである。

革命的左翼の再編は、プロレタリア階級と国家権力との対抗関係のみを通しては全く、不可能である。それは不可避免的に、戦術のみをみても一ダースぐらゐは「闘争機関」（部隊）間の分裂を生み出すであろうし、結局は力関係のみを媒介とした一時的な野合にしかすぎないものであり、したがってその党派闘争は無内容な他党派解体の消耗戦に終始し、大衆を疎外してゆく。

革命的左翼の再編、プロレタリアの階級形成は、大衆の中においてのみ、大衆の中で全人民的政治を展開する過程においてのみ、即ち、国家権力との具体的な闘争の場におけるプチブル諸階層との統一戦線の形成、その方針をめぐってのみ、勝ち取られる。

全共闘運動は、学内における、あらゆる諸階層を全面的にまき込みつつその分解再編を勝ち取るという、まさにかかる闘いであったし、「〇〇大決戦」をへた現段階において、全共闘は地域・職域において、かかる闘争を展開する中においてのみその再編を勝ち取る事がで

成と、政治闘争のギリギリの接点を追求するものとして、まさに全面的な人間変革、既成性の解体としての自己形成の問題をつきつめた点にある。

「帝大解体」は、この「自己否定」から出発したものとして、大学立法粉砕、教育研究支配体制粉砕と共に、既成分業体制にある学問、研究という疎外された営為の止揚を図り、学生・研究者としての既成性を実践的に人民の中へ解体していくという総体的性において把握されねばならない。

自主講座運動、解放大学、反大学、学界闘争は、一定の成果をあげつつも、いまだ全共闘学生教養コース、市民講座全共闘版にすぎない。我々は、大学における教育研究をあらゆる階級闘争の場にむけて実践的に解体していかねばならない。〈自己否定—帝大解体〉を放棄せず、自己形成の問題を保持して、自らの職域における労働者との結合をはからねばならないし、自らの職能を軸とした闘争を形成しなければならぬ。

すなわち、企業労働者・研究労働者予備軍として政治闘争を担う質で職域労働者との結合を勝ちとること、そして、帝国主義的社会総再編に対する闘争、国土再編、農業再編、軍事網再編、医療再編、産業再編等の中で生じてくる公害住民闘争、農民土地闘争、基地闘争、反合闘争等を職能闘争として担いきっていくことである。これにより、個別闘争の外延化と重層的な戦線の拡大を図らねばならない。

(四) 近代化路線に対する闘争

我々の闘争は、安田磐の攻防戦の延長上にあり、単に学問管理支配としては自主管理)によって闘えるものではなく、大学研究、あるいは教育を成立させているブルジョア社会という物質的基礎に向けて帝大を人民の中へ解体させていくということの中のヘゲモニーにおいてしか闘い得ないということは明らかである。

委託研究が体質化している工学部に於ける講座解体闘争や、委託研究粉砕がスッカリしないのもこのような事情として考えられる。例えば、建築教室封鎖における自主研究—自主設計活動の問題をとってみると、(1)メシの種として委託設計活動を行なう。(2)委託設計活動をやめて競技設計を行なう(研究の純粋化と同じであり、個別資本に奉仕するのでなく総資本に奉仕する)。(3)スケッチブックの中でのみ設計活動を行なう、等であった。現在、実践的に得られた結論は、自らを設計労働者として、全設計労働者と連帯して闘うということである。実際的には、大学という場で、研究教育の名のもとに、より安い設計料で下請設計活動を行なわず(研究室は設計料水準全体を安くする重要な環である。インターン制と同じ)他の設計労働者の労働現場で、即ち、設計事務所働き、大学という拠点での闘争の相互的拡大をはかる事である。ただその場合も、学生が産業予備軍的アルバイト集団として、事務所労働者の賃金を切り下げることになるのだという事に闘っては、われわれが学生・院生であることにおいて未だ解答を見いだしていない。文化大革命で問われた「正規」教育か、「業余」教育かという問題として自主講座の事務所労働者への解放、事務所におけるグループ活動等一つの方向性として模索している。委託研究粉砕闘争は実践的には、研究の純粋化へとではなく、まさに帝大解体の

体制の改革を求めるものでなく、教育研究体制の全面的な帝国主義的再編に対する闘争として、具体的には中教審路線・近代化路線粉砕として日帝打倒を射程に置きつつ闘われた。この教育、研究体制の再編の経済的基礎が、日帝の科学技術政策、産業合理化政策、国土再編政策によって与えられる以上、単に個別教育研究体制という領域での右からの再編に対する抵抗としてのみ闘えるものではないし、同時に反帝闘争として反戦、反安保闘争にのみ集約されるものではない。つまり、経済・社会・政治の全領域にわたって人民の闘争に依拠しつつ先進的に闘う事なしに勝利しえないのは明らかである。

さらに「安保を破棄し、学問研究を發展させよう」という輩の無内容性については改めていうまでもないが、教授会の諸権限を奪い教育研究管理体制の徹底的民主化するという、個別闘争におけるワクを越えられず、単に急進化させる事によって④を引っぱり出し、⑤を媒介として安保粉砕と政治課題を街頭闘争として接木するだけであるとすれば、無内容なスローガンと、同じレベルである。六九年全国学園闘争が、秋期政治決戦を目前に迫られており、戦線の不均等性を否定する形で一切を政治課題へと一面化せざるを得なかった偏向性を正す必要がある。

又、近代化路線を単に技術的制度改革の問題に矮小化し、右からの再編に対する左からの再編をいう形で、ヘゲモニーの問題とすることも誤りである。近代化路線は、端的にいうならば、大学の経済的基礎における再編として、より効果的・直接的な産業研究教育体制への大学研究部門、教育機能の分解・吸収がある以上(大ワクでは複線化路線)、大学内制度改革におけるヘゲモニー(一般的には民主化、極限

主要な部分とならなければならない。

われわれは、戦線の戦略的分散拡大期としての現局面において、自らの日常的個別存在基盤に規定されつつ、まさに、それを自己を止揚し解体してゆくものとしての闘争の外延的展開として、職能闘争、職域闘争を提起する。

(五) 滝田論文(パルチザン遊撃軍団Ⅱ共産主義共同労働団)

①彼によれば全共闘運動は、「自己否定運動」と「帝大解体運動」の分化の過程としてとらえることができる。そして個人のレベルにおいては、「自らの個別性の原理(自己否定性)」と普遍的階級の規定の原理との分裂として現象せずにはおかなかったし、それが「全共闘そのものにおける既成性の増大、低迷、困難として現象してきた」とする。ここから得られる結論は、「個別大学的、地方的分散性、経験の狭隘性、そして個人主義的傾向、手工業性、マキアベリズム」といった「困難の根拠」を、一切適切「小ブルラディカリズムの温床」たる「自己否定運動」に帰すことによって、「帝大解体運動」こそ「自己否定の全共闘大衆運動」を打倒して「帝大解体のための大衆武装による全共闘運動」へと純化できる」とするのである。

そうではないのだ。我々がやっとな全共闘運動の中で握りしめた「自己否定—帝大解体論」(2章(4)参照)を手離してはならないのだ。自己形成の問題と政治過程との分裂は、このような二元論的把握の一方の極である自己否定論を打倒することによって止揚されるのではない。内なる自己否定論を否定し、帝大解体という思想性を獲得すればいいの

ではない。〈自己否定—帝大解体論〉を対自的総体的に把握し、そこを出発点として人民の闘争の中へ入って行ってこそ、お寒い青白いお話でなく、「共産主義と暴力」とか「大衆武装」とかいう言葉だけでなく、「ドスのきいたドロドロした話」ができるというものだ。〈自己否定運動〉を切り落し、残った〈帝大解体運動〉で作った共産主義共同労働団のかなたには、ルンプロ革命しかイメージすることができない。われわれはあくまでも生活原点に根拠地にスッポンのようにくらくらいつけるかぎりくらくらいついて闘争を続行せねばならない。その時はじめてわれわれのいう〈自己否定—帝大解体論〉が実体的な意味を持つであろう。〔京大新聞参照〕

②われわれが第2章(4)において、個別教育闘争が全人民的政治課題を先進的に担うと共に、文化革命の追求として社会的、経済的闘争の領域へわれわれの闘争を外延的に展開してゆかねばならないことを追求した。われわれは、反大学運動の基本的な二つのモチーフを支持するし、われわれの問題提起もその延長上にあるものである。

*第一のモチーフ「帝大解体はいかにして可能か」という問題意識であり、大学Ⅱ帝大が敵の重要拠点である以上、その解体作業は全人民の革命的営為とならざるを得ないし、従ってこの解体を貫徹するためには、全共闘の学生が自ら帝国主義市民社会のただ中に身を投じ、高校生、浪人、部落民、朝鮮人、官公労労働者、反戦中小企業労働者などと結合することによって—換言すれば、学生が革命力量の不均等発展から客観的に要請されては〈逆倒されたプロレタリア英雄主義〉を〈結合する政治〉の展開によって担い、かくして全人

やはり全人民武装は、全人民の闘争の中でしか提起しえないだろうし、そこでしか形成されることもないだろう。

反大学における問題講座(部落問題、朝鮮問題、万博問題、労働問題、造反講座)が、全共闘学生教養コースでしかあり得なかったのは、第一に反大学学生の原点における自己形成の問題と関連しない所で、全人民的な階級闘争の戦略的課題を設定したこと、すなわち、根拠地を党におくのか或いは教育闘争という個別性としてある大衆運動におくのかという事である。後者におく以上「職能・職域」の問題を抜きに、一般的に他の領域での社会闘争、経済闘争の根拠地を大衆闘争の場に形成することは不可能である。第二に、問題講座が、七〇年代階級闘争の主要な環に戦略課題を設定し、しかも党を媒介することなく、従来のサークル学習運動の枠組を突破するには、指摘されている通り、遊撃拠点の形成如何に運動の成否はかかってくる。そして三里塚にみられるように、自然発生性としてある闘争の場を目標として設定しても、長期の常駐体制なしに拠点を形成することはほとんど不可能である。又、遊撃拠点の建設は強固な根拠地なしにはむずかしいといえよう。我々は、〈自己形成〉から発した職域・職能という質でもって結合し、これを根拠地として、地域常駐体制という遊撃拠点の形でもって問題講座の限界性を突破しなければならない。

(二) 戦線報告

以上、三点にわたる追求の中で、職域闘争・職能闘争という課題のアウトラインを説明してきた。職域闘争とは、研究という分業形態の止揚を、職能闘争とは、研究対象の止揚を目指すものとして、我々の

民的団結の、より基本的には階級形成の工作者集団として登場する……。

第二のモチーフ「学問批判論……個々の現象及び所与の形態についてでなく、これらを成立せしめる根拠にまで切り込み、それを学問の原理的発進基地である自然的Ⅱ人間的Ⅱ社会的実践からの絶対的隔離(単純に言えば精神労働と肉体労働の分離)として確定し、この一点から大学アカデミズムの不毛と乱れを批判する視点を確立し……主体の本質における経験的既成性を解体し、いんらん人間群の形成……。」〔ストラッグル参照〕

しかしながら、彼は反大学運動の総括を、「独自の運動形態を打ち出し得なかったために停滞し、従って具体的な正しさを我がものと成し得なかった……一切の根拠は、一つには、我々が反大学を根拠地的に位置付けておりながら、自己の遊撃拠点を形成することに成功しえなかったことに、又一つには何でもって、どのように結合するのか、という結合の質と形態の問題に無自覚であったことに存在していたのである。」として、全共闘バルチザン遊撃軍団と共産主義共同労働団の同時形成により遊撃拠点と総合の質を獲得できるとする。われわれは、「共産主義労働団」といった大学における市民権の喪失を経済基盤の獲得という共同利害性で結合するような質を自ら求めようとは思わない。これはやむを得ずそうなる時もあるという程度のものである。そして戦略的な市民社会内での闘争課題の問題を抜きにした遊撃軍団などわれわれは必要としない。彼の〈暴力〉への真摯な探求は理解できなければならない。それが暴力信仰にのめりこんでいくことを拒否する。

疎外労働の止揚に二つの方向へ闘争課題を設定した。最終的には両者の結合が図られるべきであるが、当面は意識的に分離していきたい。

このような課題について我々の戦線から報告できるのは、第一に、医学部における青医連の医療再編に対する闘いがある。職域への展開は、医療労働者との結合という形で一定の成果をあげてきたが、職能における患者との結合点を持つにはいたっていないのが現状である。第二に、農学部共闘の農業の再編に対する闘いがあり、職域における農業技員との連絡を、淡路空港粉砕闘争の中でとりつつあり、職能において淡路島闘争委員会という根拠地を学部内に形成しており、援農体制は準備されている。第三に建築共闘において、設計労働者反戦形成へ向けての取組みがあり、職能闘争として、国土再編に対する闘いとして淡路島闘争委員会が形成されている。又、土木共闘においても同様に淡路島闘争委員会が形成されている。第四に工学部共闘の中から、界における公害闘争を担う部隊が、界闘争委員会として登場している。これらの総称を我々は〈地域闘争バルチザン〉として確認している。

淡路闘争委員会活動報告

第一期 六九・七〇・一〔準備期〕

(1) 地元有志との接触、(2) 基礎的調査、(3) 各地集会への参加・問題提起、(4) 関西新国際空港阻止連絡センターの形成—30数団体結集

第二期 七〇・二・七〇・三〔地元住民との直接的接触〕

(1) 淡路解放高校の創立

(2) 農村調査—敷地周辺八〇〇戸に対して、

(3) 空港反対キャラバン—島内七ヶ所における連続集会

- (1) 農村調査から農村工作へ
- (2) 淡路高校における高校生による機関紙発行
- (3) 地域住民に対する全面的宣伝戦
- (4) 「淡路空港研究会」の結成各反対同盟より参加
- (5) 政治課題への取り組み—淡路反戦形成へ

〔第3章〕 プロレタリア階級形成と地域闘争

(イ) 全人民的政治の展開を

次に、「職能・職域闘争の展開を」から『学園から地域・職域へ』、『地域闘争の展開を』というスローガンの転換をいかなる質において獲得したのかを述べなければならぬ。それはとりもなおさず六〇年末の学生反乱を六〇年代政治過程においていかに評価するかによる。

全共闘学生反乱をそれまでの政治過程と明確に区切るのは、それが学園内という限定性を持っていたにせよ、国家権力・学内諸権力との実力対決を軸に、あらゆる学内諸階層、大学市民社会を全面的にまき込み、全ての人々に革命か反革命かの決断を迫りつつ、その分解と再編、大衆武装においてヘゲモニーを貫徹した点にある。

第一次羽田闘争以降の政治過程を特徴づけるものは、勝れた目的意識性に基づく先鋭な実力闘争によって政治焦点を作り出すことによる政治暴露によって市民社会の流動化を勝ち取るという全国政治の展開であった。それは、主にインテリゲンチヤ、市民の意識性に依拠し

た闘争である。

それに対して、階級的危機の時代、七〇年代における政治過程は、人民の全ての層をまき込む形で進行する経済的、社会的、政治的矛盾の深化、階級的抑圧の進行に対して、住民の全ての層、階級を対象とした宣伝、煽動の展開、階級的な反撃を用意し、革命勢力の再編を勝ち取るという形で展開されなければならない。

六〇年代における市民主義的政治から、全共闘運動型政治への転換を勝ちとる事、それは単にプチブル諸階層との統一戦線を自己目的化するのではなく、われわれはこの転換過程においてのみ、革命的左翼の、プロレタリア階級の再編とその前衛部分の登場が保証されるという事を確認しなければならぬ。

プロレタリアートにとって階級形成とは、資本家階級(工場内における)、あるいは国家権力(街頭その他)との敵対関係においてのみならず、あらゆる他の諸階級との対立抗争、共闘関係において、まさに自らを定位し、確立してゆく、実践的活動である。即ち、この実践過程とは、プチブル諸階層との統一戦線形成におけるプロレタリア・ヘゲモニーの確立過程である。

プロレタリアートにとって権力奪取の目的意識性は、「自らがなにものであるか」を、他の諸階級との接触抗争を通して自らの意識行動の領域を拡大し、敵と味方を確認してゆく実践的活動を通してのみ確立される。経済闘争、社会闘争の深化によって、国家権力にプロレタリアートを「つきあたらせる」だけでは十分でない事はくり返すまでもなからう。

ここに党の役割は、「一般的情勢分析のプロレタリア階級への外部タリア階級のみが、この①②③④の領域の相互関係を、生産過程における賃労働—資本の関係を媒介としつつ、国家—階級支配の本質として全面的に把握することができる。

国家独占資本主義の下では、搾取は労働者の労働過程のみならず全生活過程において行なわれる。即ち、労働力商品の売買価格||生産者の切りつめは、労働者の生活過程、即ち都市における共同消費形態(公共住宅、清掃、公園、公共建造物等)の支配、一定程度の国家主義的経済政策によって行なわれる。

生産過程における賃労働—資本の矛盾は、国独資の下では、生活過程に解消される。このブルジョアの市民関係を軸に「都市生活」という共同消費過程に対する国家主義的な社会資本充実政策へと解消されていく物質過程は、ブルジョアの市民関係、法—国家の確認として幻想過程(住民自治—国家)を生み出してゆく。

しかしながら、戦前、都市における矛盾が農村に還元され、農村があらゆる矛盾の集積点であったように、現在においては、生産関係における矛盾が生活関係へ解消されてゆく過程は、同時に新たな矛盾が生生活過程へ累積してゆく過程でもある。そして、その生活関係は、その市民的關係としてある都市生活の共同性(部分的であれ)故に、又それに対応した国家主義的政策の故に、地域におけるあらゆる諸階層をまき込まずにおれない形で矛盾が発現する。

しかもその中で、ただプロレタリア階級のみが、労働過程における賃労働—資本の關係に媒介されて、生産過程における闘争を、ブルジョアの生産關係の止揚という目的意識性へと還流させることができる。ここに、反帝闘争としての統一戦線の実体的基礎がある。

からの持ち込み」と矮小化されるものでなく、プロレタリア階級が外に出る構造、即ち他の住民諸階層が外に出る構造、即ち他の住民諸階層と接触、抗争、統一する場||国家権力・資本家階級との闘争の場||を側面的に媒介する事である。プロレタリアートにとって階級意識は、まさに受け取るものとして外部から持ち込まれるものではなく、党を媒介として、プロレタリアートが「地主や坊主、富農や農民、学生や浮浪者」等の「住民のすべての階級の中にはいつてゆく」という主体的实践の中において自らを定位する事においてのみ形成される。

党の役割は、この媒介構造—統一戦線(地域ソヴィエト)—の設定と、権力奪取の目的意識性を集約するものとして形成されるのである、それ以上では決してありえない。

(ロ) 都市(地域)の構造と地域闘争

都市社会学における一般的な理論展開は、だいたい、①階級分析(生産過程における住民の階層分析、資本家・労働者・中小商工業・農民等)、②現象的な都市の病理学的分析(生活過程における住民の階層分析、広義の都市問題)、③社会的基礎組織の分析(都市共同生活分析の軸とした住民組織の分析)④住民自治—地方自治体—自治体闘争(市民的権利の確認過程—都市共同生活・宗教・教育・政治)の道筋をたどる。

このようなブルジョア科学の方法論においては、なんら都市問題が解決されないのは明白である。資本主義社会においては、ただプロレ

以上我々は《地域闘争》の内容を、①において全人民的政治の展開、即ちプロレタリアートの階級形成の場として、②において統一戦線の実体的基礎とプロレタリアートのヘゲモニーの確立として述べた。

その具体的形態は、自治体闘争を軸とした社共型統一戦線と、我々の地域的課題（公害、住宅問題、農民土地闘争、等）を学園、生産点における局地的反乱を軸として展開する地域ソヴィエト型統一戦線との二つの方向に展開しうる。

自治体闘争は、一般的民主主義運動の場として、プロレタリア階級にとつて他の諸階級と出合う場所的有効性を持っている。しかしながら自治体闘争は市民の關係の確認でもって絶えず幻想過程へ足をすくわれる場でもある。自治体闘争は、労働者階級にとつても他のプロレタリア諸階級にとつても重要な政治訓練の場である。即ち、幻想過程を自分の足で踏み越える場としてであり、プロレタリア諸階層を労働者階級が獲得する場所そのものでは断じてない。

以上、都市と農村との構造連関について展開できなかったが、それは次の機会としたい。

〔第4章〕 地域闘争を軸に全国全共闘、地域反戦の

ソヴィエト的再編を

京大全共闘は、その解体再編過程において二つの方向に向けてバルチザンを生み出していった。一方は滝田バルチ（共産主義共同労働団）であり、他方、我々職能・職域闘争バルチ、地域闘争バルチである。我々は、二つの闘争委員会でもって、二つの地域（淡路、堺）に

ている。

地域闘争を軸とした全人民的政治を實踐的に追求してゆく過程においてのみ、全国全共闘・地域反戦の再編はまさに大衆のものとして勝ち取られる。

七〇年、この一年におけるわれわれ革命的左翼の闘いは、インドシナー沖繩ー安保という情勢のもとに、大胆に地域に政治的課題を持ち込みつつ、同時に地域住民のあらゆる階級、闘争の中に入ってゆき、徹底的に自らの経験の深化を勝ちとる事である。

公害闘争、基地闘争、農民闘争、住宅問題等々の人民の闘いの先頭に、先進的労働者、学生、高校生は、理論家としても、宣伝家としても、煽動家としても、組織者としても、全ての根拠地から出かけてゆかなければならない。

根拠地から地域へ転戦（逃げる）するのではなく、まさに根拠地へその経験を環流させ根拠地をより大衆的に再編せよ！

5月に入ってから朝日新聞・毎日新聞等々における「公害キャンペーン」は、明らかに生活問題をもち込む事によつての、安保闘争に對する戦線分断の策動である。

われわれの力量は、戦闘力は、この分断策動に對し、根拠地ー地域ー全国政治の全面的展開でもって十分に反撃しうる事を確認せよ！

最後に我々は今秋に「地域闘争」という旬刊誌を計画している。全国の同志からの寄稿を期待したい。

において闘争を展開している。さらに現在、第三、第四の闘争委員会が準備されつつある。一方すでに、関東においてもかかる潮流は存在している。

六〇年代における全国的な政治勢力の伸長をふまえて、革命的左翼は直ちに、帝国主義的な全面的社会再編の環に對して、地域におけるあらゆる社会層、諸階級を對象とした地域闘争、地域における政治、反乱を展開し、地域反戦、地域全共闘、地域へ平等等のソヴィエト的再編、まさに「全人民的な暴露を組織する党」の形成に着手しなければならぬ。

六〇年代における市民主義的暴露政治の一面性を清算し、全共闘型闘争を、あらゆる階級的矛盾環、とりわけ地域闘争を軸として展開する事によつてのみ、その革命勢力と前衛部分の登場は保証されるのである。

「われわれは、自分の宣伝や煽動を住民のすべての階級にむけておこなうだけの人手」を「もっている」。直ちに、地域における政治、地域における具体的課題に對する部隊配置を行ない「理論家としても、宣伝家としても、煽動家としても、組織者としても」住民のすべての階級の中に入ってゆかなければならぬ。

七〇年代の包括的・全面的・強権的な経済・社会再編は、あらゆる場所でも——例えば教育闘争・公害闘争・農民闘争・基地反乱——社共型政治回路を無効にしつつあるし、又同時に、狭い市民主義的政治闘争の回路も無効にしつつある。

全国学園闘争の燎火の展開は、八派政治による矮小な全国全共闘連合によつては包括・再編できるものではない事はすでに明らかになっ

新たなバルチザン運動の展開を

地域斗争バルチザン闘争委員会

・全共闘運動を實踐的に清算せよ！

全国の闘う学友諸君、とりわけ六八〜六九年の全国学園闘争を主体的に闘つて来た諸君、我々は今や大胆に全共闘運動を清算し、あらゆる社会、あらゆる地域、あらゆる空間に闘いを、あの学園闘争が示した《ゲリラ闘争》の質を持った闘いを構築し、大学を一つの媒介としてその間に《流れ》を作り出し、その闘いを一つの構造へと高める作業を、たんに観念的なものでなく、現実あるがままの闘争としてなさねばならない時点に立ち到っている。

昨秋の一〇〜十一月闘争の前後、全国一〇〇余大学にのぼった学園闘争が、国家権力の前に次々と武装解除されていった時、全共闘運動を担つて来た我々は、自らの力量を、その力の大きさを知りながらも、その力量が、再び展開し、発展していけるべき新しい運動形態を持ち得ないままに、「苦渋の海」の中へと沈んでいくより外になかった。一〇〜十一月闘争は我々にとつて勝利とか敗北とかを言う以前の完全なる敗北であったのである。それは「完全なる敗北」であったが故に、敵権力の弾圧の強化や、主体のまさに「主体的な」弱さに帰せられるべきものではない。それはより我々の闘い自体の持つ内的な問題として扱えられねばならないものである。全共闘運動の崩壊とはま

さに全共闘運動そのものの展開が見えた一つの結実なのであって、我々の新たな闘いは、そのように全共闘運動の内的問題として全共闘運動の崩壊を見る中から提起されねばならないであろう。我々の地域闘争はかようなものとして提起されているのである。とは言っても我々の闘いは、未だ端緒であり、ほとんど具体的な活動を展開し得ていない現在、全共闘運動の総括もいわば一般的なことでしかないし、それらについて詳しく論ずることは潜越であろうと思われる。それ故ここではそれをごく簡単に述べてみることにだけしておきたい。我々にとって今最大の課題は能書きをタレることではなくして、現実の運動を展開し、我々の実体化を図ることなのであるから。

全共闘運動の自然成長的な展開の過程がとる結果を、京大全共闘の闘争は一つの典型として示したと言っているであろう。それは全共闘運動がとった現代社会の根底的批判への志向という内容と、それが、現実にとりて意味を持つために運動が必然的にとった闘争の諸形態、つまり「根源性」へ「能動性」へ「多様性」へ「長期性」へ「孤立性」といった諸形態との間の矛盾、更にそれら諸形態相互の矛盾がぬきざしならぬ時点で立ち到ったこと、換言すれば全共闘運動の内容の展開が、所謂全共闘運動の形態の下では、既に成され得ないこと、その形態がもはや桎梏へと転化してしまつたことが、一方であり、そしてその過程の中で反大学運動―バルチザン五人組といった全共闘運動をまた新たに発展・展開させる運動を、萌芽的に生み出しながらも、それらの萌芽を現実的に結実させ得ないままに、九月のあの国家権力の暴力の前に「崩壊」していったのであった。しかしそれはより闘いの内的な展開それ自体が生み出した「崩壊」であつたということ、国家権

力の闘争、その階級形成の問題など一切語れないからである。従つて我々の闘いは、大学を、学園闘争を媒介とした様々なプロレタリアートの闘争との結合、その中に生き生きとした相互作用を形成することではなければならないのである。

・様々の地域へと進撃し、地域闘争を展開せよ！

我々地域闘争バルチザン堺闘争委員会はこのプロレタリアートとの現実的な結合を、公害闘争を軸とした地域闘争として展開しようとするものである。公害闘争についての位置づけ等に関してはまた別の機会にゆずることとして地域闘争についてごく簡単に述べてみるなら、現代日本の社会構造、国家独占資本主義社会と呼ばれる高度な一つの全体的社会構造自体の生み出す矛盾、極めて多様な、そして根源的・全体的矛盾の、その地域における表述をとらえ、このことによつて地域階級形成の問題を語ろうとすることであり、全国性に媒介された地域末端権力機構の分断・麻痺を軸としたいわば地域反乱を展望しようとするのである。

最後に我々は現在、公害の実態調査、分析並びに地域の階層分析を軸にコンコツと活動していること、また我々の闘いが多く藤本進治氏の哲学に負っていることを述べ、次の様に叫ぼう。

全共闘運動を担つて来た諸君、次々と地域へと進撃し、我々と共に地域闘争を軸としたバルチザン運動を構築し、熱烈な現実的な連帯を勝ち取るうてはないか！

力が、いわば内的に崩壊し、空洞化していった全共闘運動の崩壊に外的な形態をまさに有効に与えたということの故に、にもかかわらず、淡路闘争委員会の活動を現実にも生み出し得たのであつたし、そしてまた今、我々が闘いを開始したのである。

この京大全共闘に見られた全共闘運動の自然成長的な運動の展開は、とてつて特殊京大にあてはまるだけのものではないであろう。それは多かれ少なかれ全ての学園闘争にあてはまるべき問題であろうし、それ故我々は今全国の学友に向つて、「全共闘運動を実践的に清算せよ！」と叫ぶのである。

・大学と全ゆる空間との結合を！

全共闘運動の実践的総括とはところで一体いかなるものであろうか。それは全共闘運動がその内に内在させた「多様な闘争」、それはより観念的なもの、観念の中での多様であつたそれを、真に多様な闘争へと発展させること、大学闘争の中で成長して来た様々な現実的社会、現実あるがままの諸過程へと伸ばしつづつある多様な「触手」を、その現実的諸過程と結合させること、それらの間に一つの「流れ」を作り出すこと、これである。

大学闘争は今や「学生運動」という狭い枠を突破し得ない限り展開し得ないのである。学生が学生としてしか闘争し得ないという狭い、ブルジョア的な枠、現代の体制そのものが強制している固定化された枠を突破し、現実の生活への切り込みを持たぬ限りダメなのである。しかし、また逆に、総体としては我々の闘いは学生運動であり続けねばならないであろう。現在、学生の運動を抜きにしてプロレタリアー

労働者教育・学習論	梅沢 謙蔵	近刊 三八〇円
現代サークル論	梅沢 謙蔵	近刊 三八〇円
青年運動の思想	梅沢 謙蔵	★四二〇円
実践の哲学Ⅰ	梅沢 謙蔵	四八〇円
実践の哲学Ⅱ	梅沢 謙蔵	五八〇円
もの見かた考えかた	三浦つとむ	二五〇円
社会主義革命の弁証法	レリオ・パツソ	九五〇円
職場新聞のつくり方	日本ジャーナリスト協会編	二〇〇円
機関紙編集実務の手引き	日本ジャーナリスト協会編	三八〇円
割りつけと小組みヒント集	日本ジャーナリスト協会編	二〇〇円
機関紙相談室	日本ジャーナリスト協会編	二〇〇円
部落 ある靴職人の視点	土方 鉄	★三二〇円
●社会新報の本	★日本図書館協会選定 東京・三宅坂●社会新報	